

### 3. 鈴屋のヒザナオシ

堀 江 未 央

- I. はじめに
- II. ヒザナオシとその変容
- III. ヒザナオシの現状
- IV. ヒザナオシ保存の動き
- V. ヒザナオシの持つ意味の変化
- VI. おわりに

#### I. はじめに

鈴屋区は、内陸部の谷あい位置するというその地形のためか、町野町のなかでも伝統的な風習が比較的に残っている地域である。本章で扱う「ヒザナオシ」という儀礼も、現在では鈴屋で行われていない独特の儀礼だ。これは日本におけるイエと地域のかかわりに基づいて行われる通過儀礼で、戸主の代替わりに際して行われるお披露目儀式とでも言えるような儀礼である。ひとつのイエのなかで戸主が父親から息子／ムコに引き継がれる際に、それを地域の人々にお披露目して認めてもらうというものだ。ヒザナオシは鈴屋に独特の風習として現在も行われているが、時の流れと共にかたちを変え、その意味合いも変化してきている。本章の目的は、調査の初日から頻りに耳にしたこの儀礼がいかなるものかを記述し、現在に至るまでの変容を明らかにすると共に、ヒザナオシの変容に見る地区内の変化を探ることである。それと同時に、簡略化されながらも鈴屋固有の文化として再認識され始めたヒザナオシの保存の動きについても見ていきたい。

#### II. ヒザナオシとその変容

ヒザナオシとは、男性が集落の人々からゴテイ／ゴテ（戸主）として認めてもらうために行われる代替わりの儀礼である。代替わりとはすなわち、一家の主が亡くなったり隠居した後に長男やム

コが跡を継いで新しい家長となるということであるが、それを地域の人に顔見せし、集落の成員として認めてもらうために行われるのがヒザナオシなのだそうだ。つまり、父親に代わって家の代表者となり、地域の集まりなどに出席して発言権を持つのでよろしくお願いしますと集落内の人々に顔見せする儀礼ということである。鈴屋区の大区長（50歳代男性）によると、「ヒザナオシ」という名称は、ヒザナオシをする前には正座をしていた若い者が胡坐をかいて座れるようになる（＝地位が向上する）ということに由来しているそうである。では、このヒザナオシとは具体的にどのような儀礼なのだろうか。この節では、ヒザナオシの基本的な行程と、戦後から少しずつ進んできた簡略化について述べる。なお、ヒザナオシの行程についての情報は主に前大区長（70代男性）から得たものである。簡略化の過程については、ヒザナオシを済ませた人たちの情報から私が考察したものである。

ヒザナオシは男性の儀礼であるため、出席者はすべて男性で占められており、原則的に女性がその場に参加することはない。集落の各家の戸主が集まって、「めさし」と呼ばれる輪島塗の大杯に酒を注いでみんなで飲み交わし、新戸主の地域参入を承認するというものである。そこには、ひとつの杯を集落中の者と共有して酒を飲むことで、新戸主が集落の一員として認められるという意味合いがあるのだろう。ヒザナオシを行うことのできる男性は既婚の長男で、婿養子に入った者も行うことができる。結婚して分家した次三男や他地域からの転入者はヒザナオシを行うことはない。

## ○戦前のヒザナオシ

ではまず、戦前に行われていたヒザナオシの行程について見ていくことにする。

ヒザナオシを行う者が出ると、集落中の家々に連絡が回る。ヒザナオシをする者の家がオヤッサマ（広い田畑や山をもつ有力者<sup>1)</sup>）の家である場合は自宅でヒザナオシが行われることもあるが、普通の家では集落中の者をもてなすだけの広い場所や道具が確保できないため、主に大区長の家がその会場となっていたようである。ヒザナオシの時期は特に決まっておらず、その家でヒザナオシをする者が出た時々に応じて行われていた。

### ◇ 準備

ヒザナオシの当日、集落内で料理の上手な者が、ヒザナオシの際に食べるための「おかず」と「お吸い物」をつくる。この「おかず」はそれほど豪華なものではなく、幾種類も用意されるわけではない。ごはん（白米）は用意されず、おかずのみが用意されるそうである。また、「お吸い物」は貝のお吸い物で、おかずを食べるときとは別に酒を飲む際に出されるものだ。奥能登一帯においてお吸い物は他の料理と違った意味合いを持っていて、酒を飲む際には欠かせないものだそうだ。ここでのお吸い物もおそらくそれと関連しているのだろう。料理をするのは男性の役割で、係として明確に決められているものではないが、毎年作ることになっている人が大体決まっ

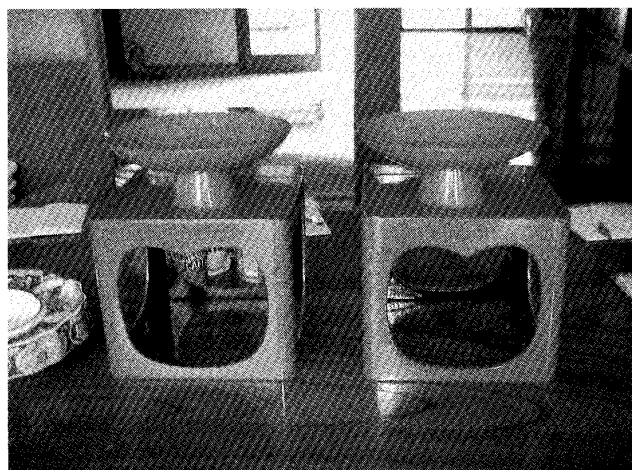
ていたようである。また、ヒザナオシの際に用いる「めさし」と呼ばれる輪島塗の大杯と、それを置くための台座、人数分の吸い物碗が用意される。裏方役としてはこの料理人の他に、儀式での介添人が二人いる。一人はめさしに酒を注ぐ者、もうひとり台座を持ってめさしを運ぶ者である。

#### ◇ 儀式の様子

ヒザナオシが始まる前に、新戸主はお金（「おかず代」と呼ばれる）と酒を持って行き、大区長に手渡す。金額や酒の量は家の格によって多少左右するが、全体として大体の相場は決まっていたようである。この酒が、ヒザナオシの際にみんなにふるまわれるものだ。新戸主は紋付き袴・羽織で来客を出迎え、全員が揃うと車座になって図1のように座る。大区長が一番上座に座り、新戸主は下座に座って大区長と対面する。他の席順は特に決まっていないが、大体年長者から上座に座るようである。挨拶の後、みんな居住まいを正して正座になる。大区長がまずめさしを持ち、介添え人に酒を注いでもらって飲み干し、そのあと2つのめさしを図1の矢印のように順に下座の者に回していく。めさしを受け取った者は、もう飲めないと思ったところで杯を少し動かして介添え人に合図をする。飲み干した後、隣の者（上座側）から自分のお吸い物を飲ませてもらい、別の介添人の持っている台にめさしを置く。介添人はめさしの乗った台をひとつ下座の者のところへ持って行き、次の者が受け取って酒を飲む。めさしは一度も地面につかないようにして手から手へと全員に回さなくてはならないため、台の上に置いて次の人まで運ぶ係が必要となるのだ。そうして順にめさしを回していき、最後に一番下座の新戸主が飲み干す。その後めさしは大区長のもとに戻されて、傷ついていないか確認する意味でもう一度大区長が飲む。

めさしを回している間は周りの者によって歌が歌われる。ここで歌われる歌は「サカナ」と呼ばれ、飲む者が

「サカナください」と言ったのを合図に周りの者が歌い出す。一人に対して三曲の歌が歌われ、一曲の間に一度口をつけ、三曲の間に三度に分けて飲み干すそうだが、「鈴屋庄内」という鈴屋独特の歌がヒザナオシの際には歌われていたそうだが、現在では歌える者がおらず、歌詞も残ってい



めさしと台座

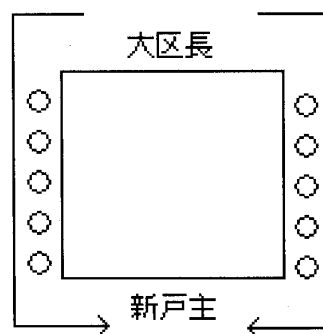


図1 戦前のヒザナオシ

ない。そのため、追分などの民謡や即興の替え歌などが歌われているようである。めさしを回して酒を飲む儀式が終わった後は、足を崩して胡座をかき、料理係によって作られたおかずをみんなで食べる。ヒザナオシを済ませた者はヒザナオシ帳に記載される。以上がヒザナオシの行程である。

## ○変化

戦後になると、ヒザナオシのやり方は少しずつ簡略化されるようになっていった。また、それまでまちまちであったやり方が整備されるようになり、それに伴う変化も見られるようになってきた。まず、かつては父親の亡き後行われるのが原則だったヒザナオシだが、戦後になると父親の存命中にも行われるようになり、いつ頃行うかは家族で話し合っ決めてられるようになった。また、オヤッサマの家が自宅を会場としてヒザナオシを行うケースは徐々に少なくなり、会場は大区長宅に統一されていった。時期も、年始の寄り合い始めのときに一括して行われるようになった。介添人など裏方の手伝いは親戚の者が行うと決まっていたのだが、最近では寄り合い始めの出席者の中から若年の者が選ばれて行うようになってきた。出席者の服装は、スーツよりもう少し少しくだけた服装（ブレザーにパンツ程度）が主流になっているようである。

整備としては、ヒザナオシの際に新戸主が持つて行く「おかず代」が均一化され、1995年から一律1万円となった。これは家の格によって金額が異なることへの批判が出たからだそうである。酒代は今でも決まっていないが、大体5升程度が一般的だそうである。ヒザナオシ中に歌われる歌についても、今ではかつて歌われていた鈴屋庄内を歌える人がおらず、歌詞も残っていない。最後に歌われたと確認できるのは1960年頃である。

近年の変化としては、集会所の利用が挙げられる。鈴屋にあった保育所の建物が、保育所の移転によって使われなくなり、1992年から集会所として利用されるようになったのである。ここは寄り合いや地域の集まりなどで使われる場所となり、現在ではヒザナオシもそこで行われている。だが、この集会所はあまり広くないために以前のようなかたちで座ることができなくなってしまった。そのため、図2のようにコの字形に座るかたちが取られるようになった。新戸主は下座ではなく、上座にいる大区長の隣に座るのである。

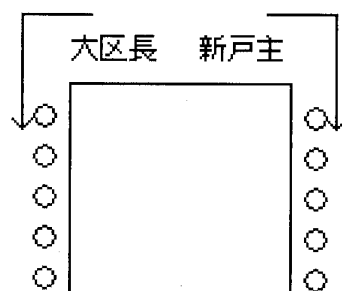


図2 集会所でのヒザナオシ

なお、ヒザナオシのほかにも地域参入に関連する事柄として、「ツラアテ」もしくは「ツラダシ」というものがある。鈴屋には「ツラ」と呼ばれるイエの所有権のようなものがあり、それを持っている者が本当の鈴屋の住民だとされている。鈴屋に一番初めに住んでいた51名で共有している共有

林の権利が「ツラ」なのではないかと前大区長は推測する。新宅（分家）や新たに転入してきた者は、この「ツラ」を持っていないために少々立場が弱くなってしまうということがあるようだ。いっぱしの者として認められるために、新宅の者や転入者はツラを買わなくてははいけなかったのである。前大区長の話によると、日露戦争や第二次世界大戦の頃に、「自分の代わりに戦争に行ってくれたら生還した時にツラを譲ってやる」というような取引もされたそうだ。この「ツラアテ」「ツラダシ」はすべて前大区長からの情報によるものであるが、現在ではおそらくツラのやりとりは行われておらず、ツラというものの存在を知らない人も多い。

また、その他に「在所まじり」というものもある。これは現在でも行われている儀礼であるが、外からの転入者や新宅の者、入り婿が在所にまじる（参入する）という意味で、それを地域の者に顔見せする儀礼である。大区長宅に酒とお金を持って挨拶に行き、みんなでその酒を飲み交わすというものだ。現在ではヒザナオシと共に行われ、行程も全く同じである。

### Ⅲ. ヒザナオシの現状

現在では年始（主に1月の第四日曜日）の寄り合い始めの際に行われるヒザナオシであるが、その現状はどのようなものだろうか。この節では、私が実際に見に行った2006年1月29日の寄り合い始めの様子について述べる。

まず、寄り合い始めというものについて多少の説明が必要だろう。鈴屋では定期的な寄り合いが年に二度行われる。一度目が年初めに行われる寄り合い始めで、これは「大寄り合い」「総会」とも呼ばれ、新年会という色彩も合わせ持っている。前年度の事業報告や決算報告及び次年度の予算案などを報告し、みんなで確認したあと宴会をする会合だ。もうひとつが年末に行われる家役寄り合いである。これは「暮れの総会」とも呼ばれ、予算よりオーバーした雑費の振り分けや、家役費と呼ばれる町会費の額の確認、役員の改選などが行われる。

どちらの寄り合いも、原則として各家の代表者（戸主）が1人ずつ参加する。戸主が都合で出られない場合は代わりとして妻や息子、母親などが出席することもあるが、基本的には男性のみの集まりである。また、どちらも全戸から出席することとなっているが、実際の出席者数としては家役寄り合いよりも寄り合い始めのほうが多いようである。

では、寄り合い始め当日の様子について述べることにする。

寄り合い始めの当日は、久しぶりの快晴であった。早朝のきんとした空気のなか、集会所の周りには何日か前に降った雪が白く積もり、青空に映えて目にまぶしい。朝8時過ぎから、集会所の台所では大区長の奥さん（50代）と親戚の女性（70代）が2人で料理の準備を始めている。献立はア

ジのだんご汁と刺身、そうめんかぼちゃの酢の物だ。だんご汁に使う魚のすり身と刺身は魚屋さんに頼んで配達してもらっており、酢の物に使われているそうめんかぼちゃはスーパーで買ったものだそうだ。使う具材にこまかい決まりごとはなく、汁物と刺身、酢の物という献立が定番なので毎年そうしているということである。

この集会所は、使用されなくなった保育所の建物を鈴屋区で買い取って集会所として使っているため、建物そのものが古くお湯が出ないと奥さんたちがこぼしている。町野町にはもうひとつ共用のきれいな集会所があり、町内の他の地域はそこを使って寄り合いなどの集会を行っているので、そっちに移るか、もしくはここの集会所を立て替えるという案も出ているようだ。奥の会場では大区長が寄り合い始めで用いる配付資料の整理、プログラムの確認などを行っている。このような準備は大区長が1人で行うもののようだ。あらかじめ準備しておくことは、ストーブをつけて、贈られた酒類を並べ、式次第の確認をするというものである。会場の隅には既に酒の入った箱がいくつも並んでいる。これは主にヒザナオシをする人から贈られたもので、現在では1人4升が一般的だそうだ。今年ヒザナオシをする人は3人なので、それぞれから4升で計12升、引越の際に集会所を利用した人からお礼代として2升、大区長から2升の合計16升が並んでいる。基本的には清酒であるが、最近はビールでも差し支えないようだ。

大区長が準備をしていると、途中でヒザナオシを行う人の1人（50代男性）がやってきて、ポケットから出した「おかず代」の封筒を大区長に手渡した。特に改まった様子はなく、会話のついでに「おう、そういえばこれ」と言って、しわになった封筒を伸ばしながら片手でひょいと渡していた。この人は、子供の入試でヒザナオシそのものには出られないそうだ。今年ヒザナオシをする三人のうち二人が欠席し、当日出席するのは1人だけなのだそうだ。ヒザナオシをする本人が欠席するということはこれまで前例がないそうである。欠席の理由は、先ほどおかず代を持ってきた人がお子さんの入試で、もう1人（50代男性）については不明であった。

9時半頃から人が少しずつ集まりはじめ、10時になると出席者に式次第が配られて寄り合いが始まる。今年の出席者は30名程度だ。寄り合い始めのプログラムは次のとおりである。

- ① 区長挨拶
- ② 平成17年度の事業報告
- ③ 平成17年度の決算報告
- ④ 平成18年度の事業案及び予算案
- ⑤ 平成18年度の主な事業内容の検討
- ⑥ 平成18年度の人夫賃及び割当金の検討
- ⑦ その他

ヒザナオシは最後の⑦に含まれており、諸々の報告や話しあいの後に行われる。①～⑥の報告は大区長と書記会計(50代男性)によって進められていた。みんな神妙な面持ちで報告を聞いており、至って真剣だ。ところどころプログラムの順番が入れ替わることもあったが、ほぼ時間通りに進んでいく。話し合いの中でよく発言するのは、大区長が「長老」と呼ぶ前大区長や「長老方」と呼ばれる地域の有力者たちであるように見受けられる。議題に上ったのは、鈴屋神社へと続く通路の拡張工事についてや、融雪溝設置のための負担金についてなどである。10時40分頃になると、台所に立っていた大区長の親戚の女性が出席者の人数を確認しにやってきた。寄り合いの最中なので少し遠慮がちだが、それでも会場にしばらくいて、みんなの話し合いに耳を傾けているようだった。

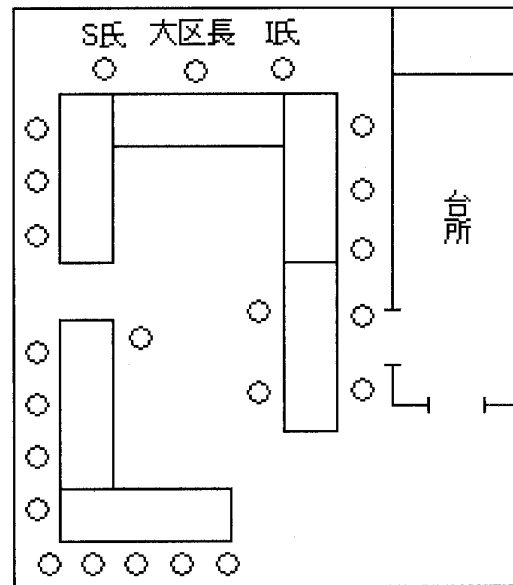


図3 2006年のヒザナオシ

12時に⑥の報告がおわると、ヒザナオシの準備が始まる。みんな緊張が解けたように騒がしくな

り、和やかな雰囲気になる。このときになると2、3人帰ってしまった人もいた。会場にいる人たちによって背の低い長机が6台用意され、足をたたんだ状態で図3のように並べられる。その間も「長老方」はあまり動かず、比較的若い人たちが働いているようだ。台所で用意されていた酒と料理が運びこまれ、それぞれ席について飲み食いがはじまる。坐り方は、上座の中央に大区長、その両側にそれぞれヒザナオシをするI氏、欠席者の代理のS氏という並びであるが、それ以外の席は特に決まっていないうだ。(上座に近いところに年長者や有力者がいるような印象を受けた。)隣の台所でめさしが準備されはじめると、前大区長が台所へ行って熱心にめさしの準備について指示しはじめる。めさしに注ぐ酒は熱燗が用いられるが、塗の器なので熱すぎではだめで、温度調節が肝腎なのだそうだ。

すべての準備がととのうと、いよいよヒザナオシの始まりだ。2人の介添え人(共に50代男性)がそれぞれ台座に乗っためさし、銚子を持って大区長の正面に正座する。大区長が台座からめさしを取り、介添え人に酒を注いでもらう。めさしを大きく上にあげると注ぐのをやめる合図なのだが、銚子を持った介添え人の男性がふざけて多く入れるので、笑いが起こる。酒が注がれると、歌の上手い人が周りからはやされて祝い歌を歌いはじめた。鈴屋庄内は既に失われてしまったため、相撲甚句の替え歌「我流甚句」が歌われたが、ヒザナオシをするI氏の名前を何度も歌いまちがえてしまい、周りから訂正されていた。大区長は酒を飲み干したあとめさしを台座に戻し、次にI氏がめ

さしを取る。再び介添え人が I 氏に酒を注いでいると、となりの男性がお吸い物の入った漆塗りの汁椀を台所から持ってきて準備をし、I 氏が少し酒を飲んだあとに口元に持っていってお吸い物を飲ませてあげていた。これは料理で作られていただんご汁とは別に儀式用に準備されたものであるが、今回はインスタントのお吸い物を使っていた。この漆塗りの器は基本的に「ベン」「ベンもの」と呼ばれる動物性の食材（なまぐさもの）を入れるものではなく、「ベン」の入っただんご汁は瀬戸物の器に入れるようである。欠席者代理の S 氏についても I 氏と同様にめさしを取り、酒を注



ヒザナオシの様子

いでもらい、歌を歌われながら酒を飲むという行程だった。S 氏のときは違う人が歌の指名をされ、花笠音頭を歌っていた。そのあとめさしは再び大区長の元に戻され、大区長が最後にもう一度飲む。以上がヒザナオシの行程である。ヒザナオシが終わったあともずっと宴会は続き、1 時 30 分には全員で万歳三唱が行われて一応寄り合い始めは終了するのだが、そのあともみんなその場に座って飲み続けていた。

めさしは本来ふたつ使われて、二つのルートで出席者全員に回されるのが伝統的な方法だが、現在ではひとつしか使われず、大区長と当事者以外の人には回していなかった。上座の席でヒザナオシが行われている間も会場全体には始終和やかな宴会の雰囲気が流れており、神聖な儀式の場といった緊張はほとんど見られなかった。「上座だけがヒザナオシの神聖な場所で、他の席は普通の宴会と同じだ」という人（50 代男性）もいた。かつて大区長宅で行われていたときは床の間があって雰囲気が出たが、今の集会所ではどうも雰囲気がでない（60 代男性）という意見もあった。だが、ヒザナオシをする本人（I 氏）は緊張したそうである。

近年では、そろそろヒザナオシをしてもいい年齢・家庭状況になった者に対して大区長が声をかけるということがしばしば行われている。今年ヒザナオシを済ませた I 氏についても、大区長から声がかかったために急遽行うことになったそう。I 氏は婿養子で、8 年前に鈴屋に越してきたため、そのとき地域参入という意味で在所まじりを行っている。その後寄り合いなどにもずっと参加していたため、いまさらヒザナオシをして改めて地域参入の儀式を行うべきかどうか葛藤があったそう。だが、去年義父が亡くなったこともあり、あまり年齢が高くなるとヒザナオシをしづらくなるため、今年声をかけてもらったのはいいタイミングだったかもしれないということであった。ヒザナオシを終えるまでは心のどこかに引っかかるものがあったが、ヒザナオシを終えてすっきりした



そうである。

今回私が実際に見てきた寄り合い始めでは、我々が調査に入ったことで多少普段の様子とは異なるヒザナオシとなってしまった可能性も否めない。三脚つきのビデオを持参してヒザナオシの様子を撮影したため、みんな気合が入ってしまっていていつもより大げさに振舞うような点もあったかも知れない。それでも、ここでの記述によって伝統的なヒザナオシから時代に合うかたちに変わってきた生のヒザナオシの雰囲気は多少なりとも伝わると思う。

図4 2006年1月29日の寄り合い始め当日の進行状況

時刻	進行状況	出席者人数
8:00	大区長が準備をはじめる。	1名
	酒を並べ、ストーブを配置し、式次第の確認。	
20	台所で料理の準備開始。(大区長の奥さん、親戚の女性)	
9:30	出席者が徐々に来場。	14名
40	式次第配布。	17名
50	大区長、式次第の説明。	23名
10:00	寄り合い始め開始。	26名
	①大区長挨拶。	27名
10	②書記会計、平成17年度の事業報告。	29名
	③書記会計、平成17年度の決算報告。	
30	⑤平成18年度の主な事業内容について議論。	
40	④大区長、平成18年度の事業案及び予算案報告。	
	⑤大区長、平成18年度の主な事業内容の確認。	
12:00	—議論—	23名
	⑦お酒の使用状況、役員の変更など報告。	
10	議論終了。ヒザナオシの準備開始。	
13:25	長机を並べ、料理と酒を運ぶ。めさしの準備。	
15:00頃	ヒザナオシ開始。	
	全員で万歳三唱。寄り合い始め終了。	
	宴会解散。	

#### IV. ヒザナオシ保存の動き

私たちが調査に入った当初から、大区長はヒザナオシのことを「鈴屋を代表する伝統的風習」という位置づけで見ておられて、私たちにさかんに紹介してくださった。どうしてヒザナオシはかくも鈴屋を代表するものとなっているのだろうかということから、私はヒザナオシに興味を持ったのである。ここには、おそらく北國新聞から取材の依頼が来たということが一因としてあると思われる。10年ほど前から何度か鈴屋のヒザナオシを取材したいという依頼が北國新聞から来ていたのだ

が、伝統的な行程があいまいになっていることや、そもそもヒザナオシを映像などで残すこと自体についても地区内で賛否両論が出て、結局取材の話はなくなったのだそうである。この北國新聞からの動きや、私たちが調査に入ったことによって、外部者に鈴屋を紹介するものとしてもヒザナオシを保存すべきだという動きが徐々に高まってきたようだ。現大区長は、これまで「大区長」という大きな権限を持つ人物の頭の中だけにあった地区の行事などの知識をできる限り明文化し、今後誰が大区長をやっても務められるようにしておきたいと考えているため、ヒザナオシ保存に対しても積極的であるが、みんながそうというわけではない。

ヒザナオシに対する地域の人々の見方には、大きく分けて二通りがある。現在のヒザナオシは簡略化されたいい加減なもので、もっと伝統的なやり方に則って行われるべきであるとする考え方がひとつと、ヒザナオシは封建的な時代の名残であり、そのようなものを鈴屋の売りにするのは恥ずかしいので特にこだわるべきではないとする考え方である。前者の意見は主に鈴屋の有力者や伝統に詳しい高齢者の方に強く、後者は比較的若い人や、一度鈴屋区の外へ働きに出てまた戻ってきた人に見られる考え方であるように感じられた。

もちろん、このような単純な二項対比が浮き彫りになるほどははっきりとした対立があるわけではなく、グラデーションのようにさまざまな意見が存在する。たとえば現大区長は、伝統的なやり方をきちんと資料として保存していかなければいけないという考え方ではあるが、簡略化されていくことそのものに対しては肯定的である。また、今年ヒザナオシを済ませた I 氏は、厳格で伝統的なヒザナオシへの回帰には少し抵抗があつて、簡略化された現在のヒザナオシをこれからも続けていけばいいと考えている。だが、年によってやり方がまちまちである現状に対してはもう少し整備をしてほしいそうだ。

現在では大区長が声をかけないとヒザナオシをする人がなかなかいないという様子をみても、まだヒザナオシを済ませていない若年層の中には消極的な見方があるのだろう。現大区長の話によると、若者が鈴屋区内の集まりなどに参加するようになるのはおよそ 30 代後半を過ぎてからで、それもなにかの役（係）に当たった場合がほとんどだそうである。事実、全戸出席であるはずの寄り合い始めにも今年出席したのは 30 人程度であつた。「自分から在所に参加しようとする意欲が若者には少ない」という現状が、ヒザナオシにも反映されていると見ることができる。ヒザナオシという儀礼は、見方を変えれば息子が父親の発言権をうばうものである。また、地域内においてはヒザナオシを済ませていない者が発言権を持てず、「まだヒザナオシもせんもんがと言われて肩身の狭い思いをする」（40 代男性）封建的なものだと見ることにもできる。伝統的な風習に対して消極的である若年層がいるからこそ、大区長が毎年声をかけなければヒザナオシがあまり行われないう現状があるようだ。

また、そのような年代の差以外に、地区内の微妙な問題もある。鈴屋はひとつのまとまりではあ

るが、新宅や転入者の多い「鈴屋町内」と、旧家の多い「カミ（上）」とに分かれている。「鈴屋町内」とは川原地を指し、江尻間、中村地、谷内地を合わせて「上」と呼ぶ。商店や銀行などはほとんど町内に固まっており、「上」の方にはあまりない。今では幾分薄れてきているが、「上」に住む長老方や50代以上の年代には「鈴屋町内」と「上」との違いを強調する傾向があるようだ。これは、前述の「ツラ」を持っているかどうかということとも関係しているかもしれない。実際に、今まで鈴屋区全体の大区長はすべて「上」から出ており、鈴屋町内から大区長を出すことに對して抵抗がある人も少なくない。このような地区内における微妙な立場の違いも、ヒザナオシ保存の意識に差をもたらしている可能性がある。今年ヒザナオシを済ませた3人は全て町内の人であるが、I氏以外は出席しておらず、I氏は氏子総代という役についている。寄り合い始め全体の出席者でも「上」の人が多く、町内からの出席者はほとんどが何らかの役についている人であった。

ヒザナオシを保存したいと思う「長老方」がいくら積極的であっても、実際にヒザナオシを行うのは若い世代の人である。その若年層に受け入れられにくいのであれば、必然的にヒザナオシをする人は減り、ますます簡略化されてしまうのではないだろうか。ヒザナオシをこれからも鈴屋の伝統として残していくのであれば、実際のヒザナオシを厳粛で伝統的なやり方に回帰させるのではなく、もっと若者にも親しみやすいかたちでやっていかなくては難しいのではないかと私は感じた。

## V. ヒザナオシのもつ意味の変化

本来ヒザナオシは、イエの中で父親から息子／ムコへ世代交代するという内の側面と、新戸主が社会へ参入するという外の側面とが合体したものであった。イエのなかでも社会においてもまだ子どもだと見られていた男性がはれて一人前の戸主となり、その地位が向上したのだということを具現化する通過儀礼という位置づけであったと私は理解している。新戸主はヒザナオシ以後、イエの中でも当主として扱われ、地区内でも社会の成員のひとりとして発言権が認められる。

だが、時代と共にその意味合いは少しずつ変化してきている。あくまで限られた情報のなかからではあるが、ヒザナオシに窺える意味合いの変化を推察してみる。

まず、オヤッサマ／小作人というようなイエごとの格差が少なくなってきたことにより、ヒザナオシの行われる場所や時期が統一されてきたという均質化の方向がある。これは、イエごとの事情よりも地区の都合が優先されるようになってきたと見ることもできる。かつてはヒザナオシと一様に言ってもイエの格によって様子が異なり、盛大に執り行われるヒザナオシもあれば簡素なものもあった。そのため、ヒザナオシはイエの格を知らしめる場という意味合いも持っていたのだが、均質化に伴ってそのような色彩はなくなり、どのイエも同じように行う地域内での通過儀礼という位

置づけになっていった。

また、新戸主の社会への参入という面についてであるが、実際にヒザナオシが新戸主の発言権を高めるという効果は現在ではそれほど強くない。ヒザナオシを済ませる前からずっと地区内の決め事に参加している人もいれば、ヒザナオシを済ませてもほとんど参加しない人もいる。仲のいい近所の同級生が申し合わせてヒザナオシを行うというケースも時折見られるそう。地区の結束力が若年層になるにつれて少しずつ弱まってきた結果として、個人の選択が可能になってきているということであろう。

世帯内での代替わりという点については、どのように変化しているかははっきりとは分からなかった。家庭内の事情に踏み入ってお話を伺うのは難しく、どうしても地区内におけるヒザナオシの役割についての聞き取りが多くなってしまったためだ。I氏によると、ヒザナオシはあくまで外向きの儀式として存続していて、父親が息子に地位をゆずるという側面はかなり薄れてきているという。だが、息子のほうからヒザナオシをしたいと言い出すのは「父親にひっこんでいろと言っているよと言い出しづらい」(40代男性)という意見もある。ここでは、イエ制度の変化とともに家庭内で父親の持つ力がそれほど強権的でなくなったために、「代替わり」というものがそれほど厳密な意味を持たなくなってきているのではないだろうかという推察にとどめておく。

最後に、鈴屋という地区を外部者に紹介するためのものとしてのヒザナオシの意味が挙げられる。地区の外からヒザナオシに対する注目が起こったことによって、地区内でもその「伝統」という側面に対する関心が高まりつつある。外部者からの注目がなければそのまま簡略化の一途をたどっていたであろうヒザナオシは、今では鈴屋を代表するものという位置づけを持っているのである。

## VI. おわりに

ヒザナオシは、かつて持っていた厳格な儀礼という色合いを薄め、新年会に付随するイベントとしての新たな側面を持ちつつある。今でもヒザナオシに世代交代・地域参入という意味合いはあり、伝統的ヒザナオシへ回帰したいという動きもあるが、毎年寄り合い始めのたびに地区のみんなが集まり、誰かが行うヒザナオシの様子をみんなで共有し、祝いながら酒を飲んで楽しむという位置づけが徐々に強まっているように見受けられた。大区長がヒザナオシ実行のためいろんな人に声をかけるのも、ヒザナオシあってこそその寄り合い始めという意識があるからだろう。

大区長の熱心な取り組みによって、鈴屋独自の伝統としてヒザナオシを保存する動きは今後も続けられるだろう。だが、それはあくまで文書・映像資料としての伝統の保存であり、実際に行われる儀礼としてのヒザナオシは簡略化の方向へ進むという予想を私は持っている。そしてその変化は

単なる衰退ではなく、時代にあったかたちへの柔軟な変化だと私は捉える。2005 年のヒザナオシでは、新戸主が鯛を一尾持参し、めさしのなかに入れて骨酒のようにして飲んだそうだ。昔のやり方だけではなく、新戸主自身の意思を取り入れつつあるヒザナオシ。それと並行して存在する、昔のやり方を保存しようとする動き。そこには、地区内の若者向けの「親しみやすい儀礼」へと進む変化と、外部者向けの「鈴屋ならではの伝統」として再認識される動きのふたつが存在する。両者は必ずしも別々の動きではない。「正統なヒザナオシ」として保存されるもののなかにも実は最近になって行われた行程が含まれているかもしれないし、掘り起こされた伝統のなかから取捨選択されて現代に甦るものなどもあるかもしれない。両者がそれぞれに影響を与え合いながら変化していくのが、これからのヒザナオシではないだろうか。

## 注

- <sup>1)</sup> オヤッサマとは町野町一帯では一般的に 30 石～50 石以上の石高を持つ家を指す（湯浅 1989: 32）。鈴屋の江尻間、中村地、谷内地という地名は、オヤッサマの姓となっている。